

|||||
 近況・随筆
 |||||

硫黄島（とう）か硫黄島（じま）か

浅海重夫

第二次大戦末期に日米の激戦地となった小笠原の硫黄島の呼称について、最近また考察をせまられることになった。一昨年のお茶の水地理学会総会で硫黄島旧島民の帰島が事実上不可能となったいきさつを話したあと、二・三の諸姉から、硫黄島の戦時中の呼び方はイオウトウだったと思うのに、あの話でイオウジマと聞かされた、どちらが正しいのかとの詰問をうけた。実は私も戦中イオウトウだったことは、当時学生で辻村太郎先生から何度も硫黄島の戦場としての重大性をふきこまれた揚句、島の地形や海況の講釈を聞かされ、イオウトウ又は単にイオウあるいはエオウと発音する先生のお話を信じていたから忘れはしない。しかし昭和43年の小笠原返還以来、この島はイオウジマとも呼ばれるようになったと思われる。昨年の暮に小笠原諸島振興審議会（国土庁内の審議機関）に出席した折、国土庁の役人や村長さんにあらためて正式な呼称をたしかめてみたところ、必ずしもイオウジマでなければならぬという確答はなかったので意外に思った。かつてイオウトウと呼ばれていた（らしい）こと、何故変わったのかはわからないこと、そしてそうしたことにあまり頓着していないらしいことなどがわかった。今は戦争を知らない人たちが既に若い人ではなくなったが、村長さんもまだ40代とお見受けする方だから、イオウトウという呼び名を肌で感じたことはないのだろう。私など戦中派にとっていまわしく悲惨な硫黄島の記憶を少しでも軽減するために、イオウトウをイオウジマに云い代えるのはよいことだとの意識が働いた。

地名（島名もふくめて）の呼び方はその地を表わす固有名に共通語尾名詞が付いた語法から成立している。硫黄島の場合は硫黄というこの島のかつての特産物を表わす固有名の部分と、島という共通名詞の部分とから成立つ。硫黄島の呼称問題は共通部分である島をどう読むか（発音するか）である。何々村とか何々島と呼ぶとき、村・島はそれぞれ同じ読み方で統一されることが望ましい。日本中の島の名を調べてみるとシマ（又はジマ）がほとんど例外なく使われている。すな

わち訓読みで統一され、音読み（トウ）は使われない。ほかの多くの地名についてもこの統一性は守られているが、〇〇町や〇〇山などは音訓の両方が用いられる。しかしその場合も個々の町、山を呼ぶときは音訓のどちらかにきまっている。またきまっている方が望ましいが、例えば私の住む千川町はセンカワマチと云ったりセンカワチョウと云ったりするのが実情である（ただし、今後正式な呼称は千川であって町はつけないから面倒はない）。

硫黄島について日本地名索引（1981）を調べると、硫黄島（火山列島の）はイオウジマとなっており、鹿児島県薩摩硫黄島もイオウジマである。日本地名大事典（昭和42）も同じ。なぜ戦時中にイオウトウと呼ばれたのかむしろ問題となる。あるいは以前からこの島は音読みされていたのだろうか。戦時下に新聞ニュースの報道が誤って伝えたのではないかとの疑いもある。いっぽう戦後、米軍による硫黄島戦記には、Sulfur Island（Iwo-jima）と書かれていたという。日本でイオウトウの名で語られた戦争の実相を米軍戦記で知り得たのは返還後のことだった。そこでそれを読んで以来日本でもイオウジマと呼ぶようになったとの説に対しては、うがちすぎの的はずれの感があるが、何が真相か誰かに教えてもらいたい気がする。

地名とは本来その地の住人が使う名であるはずで、それを正しい呼称とみとめるべきであろう。由来はともかくとして、現在の呼び名が尊重され、それが通用するのが現実であろう。今や観光地として広く知られる北アルプスの白馬（ハクバ）町（および岳）は以前の白馬（シロウマ）であり、さらに由来は代掻馬（シロカキウマ）にさかのぼるといふわけだ。ところで硫黄島には今、自衛隊員と気象観測員が常住するのみで、前述のようにこの島には本来の住民がいない。父島や本州に引揚げたまま生存している元住民に「正しい島名」を聞く機会がなく、戦前からの島の呼称とその変遷についてもうかがうことができないでいる。